

序

国際幼年教育協会は、一八九二年にその前身である、万国幼稚園連盟が創設されて以来、幼児教育の理論と実際を進めることに積極的に努力してきた。この協会の機関誌である「子供の教育」は、一九二四年に創刊され、幼稚園界の指導者の論説を紹介しはじめた。一九三一年には、ナースリースクールの教育が協会の中にとりいれられ、一九四六年には、二歳という小さい年齢の子どもの要求や福祉にまで注意が向けられるようになった。ほぼ七十五年にわたって幼児のための仕事を継続し、四十年にわたって、六歳以前の子どもとの教育と福祉に関係するあらゆる専門分野を代表する指導者の第一級の論説を紹介しつづけた功績は、実に顕著なものがある。

幼児に対する関心が全国的なものとなるのは、ほぼ一世紀を費やしたということは不幸なことであったが、今や、機運が熟してきている。最近の連邦の法律は、この高まりつつある関心に拍車をかけている。児童発達センターとしてのヘッド・スタート・プログラムの実施は、あらゆる社会階層のすべての子どもに役立つことを示している。幼稚園を公立学校制度の統合的な一部分として見る傾向は一九六五年連邦の初等中等教育令によって促進された。他方託児施設は急速に拡大しつつあるが、それはもはや「子守センター」とは考えられていない。それは児童発達センターと同じ内容をもつものであり、訓練された教師の指導のもとに、注意深く計画された教育プログラムをもっている。長い間必要を感じてきた研究が、幼児の要求について、学習の仕方について、教材について、教育方法について、今や実施されつつある。これらの研究や実験の結果は、幼児教育について先人が教えてくれた多くのことを改めて確認しつつある。われわれの先輩たちの洞察は、何とすぐれたものであろう。最近の科学的研究や実験、またヘッド・スタート・プログラムのような経験から、われわれは多くのことを学んだ。しかし、われわれは子どものために、子ども時代を確保するように注意し、努力を払わねばならない。幼児は、どのひとりも、その子どもの故に価値があるという哲学を、われわれは強調しつづけてねばならない。国際幼年教育協会は、子どもの幸福を促進するために、気をゆるめることはできないのである。

幼児に対する教育計画への関心が高まりつつあり、幼児とともに生活し教える使命をおびた数万人の大人の要求もあるので、国際幼年教育協会の事務局は、機関誌「子供の教育」から注意深く論説を選択し、この小冊子を刊行することにした。ここに収載した論説の著者は、いずれも、幼児教育および関連分野の専門家の第一級の人々である。ここに述べられている論説はいずれも時宜に適したものであり、現代の知識や思想傾向の中で考えられたものである。われわれは、ここに集められた論説が、多くの新しい教師にも役に立つことを願っている。図書館でいろいろの雑誌をひっくりかえしてみる代りに、ここに小冊子としてまとめられているので、これは幼児とともに働く多くの人々にとって便利なものであろうと思う。しかし何よりも、この小冊子を通して、全世界の幼児が利益を得ることを私どもは願っている。

デル・C・クザネル国際幼年教育協会会長（一九六五—一九六七）